詩人の誕生
――若きホダセヴィチと初期詩篇――

三　好　俊　介

はじめに

本稿の目的は、ロシアの詩人V・F・ホダセヴィチの出自や初期の実人生に関する情報のうち重要なものを紹介し、それらが彼の基本的文学観の形成にいかに結びついたのかを明らかにすることにある。[1] 数の限られる従来のホダセヴィチ研究では、この問題は十分に考察されていない。また、わが国においては初期ホダセヴィチの作品や実人生が体系的に考察・紹介されたことはなく、断片的エピソードを紹介する少数の事例が存在するのみである。

従来、ホダセヴィチについては伝記的事実そのものが十分に解明されておらず、彼の生涯と作品の関係を精密に論じるのは困難を伴った。しかし、近年に至りロシアで相次いで二つの本格的なホダセヴィチの評伝が刊行され、[2] この

1　本研究はJSPS科研費JP15K02421の助成を受けている。
引用する詩や散文の和訳は特記する場合を除き、全て引用者による。引用するホダセヴィチ詩の底本は、最新の8巻本作品集（刊行中）の第1巻 *Ходасевич В.Ф.* Собрание сочинений в 8-и томах. Т.1. М., 2009.（脚注では *Ходасевич-8* と略記）を用い、テクスト末尾の［　］内に底本での頁数を示す。詩作品以外のホダセヴィチの著作は4巻本作品集（完結）の第4巻 *Ходасевич В.Ф.* Собрание сочинений в 4-х томах. Т.4. М., 1997.（脚注では *Ходасевич-4* と略記）を用い、脚注にその事実を示す。また、一部の情報は「詩人文庫」版1巻本ホダセヴィチ詩集 *Ходасевич В.Ф.* Стихотворения. Л., 1989.（脚注では *Ходасевич-1* と略記）に依る。

2　*Шубинский В.И.* Владислав Ходасевич. М., 2012.（以降 *Шубинский* と略記）および *Муравьева И.А.* Жизнь Владислава Ходасевича. СПб., 2013.（以降 *Муравьева* と略記）。なお、本稿で触れる伝記的事実のうち、上記2種の新刊評伝を含め複数の資料で言及される事柄は原則として出典の記載を省略し、重要、あるいは従来知られていない事柄には脚注に出典を示す。

種の困難は除かれつつある。本稿では、既存の各種資料に加え上記の評伝を、事実関係の確認のために用いている。

ホダセヴィチは詩人として成熟した後に、自身の生い立ちを振り返る一篇の美しい詩を書いている。本稿では考察の手順として、本題となる初期詩篇はあえて後に回し、まずは三十歳代に書かれたこの詩篇「母ではなくトゥーラの農婦に……」(前半4連は1917、後半1922執筆)を読むことから始めたい。[3] なぜなら、ホダセヴィチにとって幼年時代の何が真に重要だったのかが、この詩で物語られているからである。詩人の生い立ちの基本線をたどり、他に必要な伝記的情報も補足したうえで、最後に主要な初期詩篇をいくつか味読して、詩人の波乱の実人生が作品に昇華される様相を確認することにしたい。

1. 詩人の誕生

・・・

Не матерью, но тульскою крестьянкой
Еленой Кузиной я выкормлен. Она
Свивальники мне грела над лежанкой,
Крестила на ночь от дурного сна.

3　ホダセヴィチ詩の多くは執筆時期がかなり正確に（生前刊行詩集の収録作品については第二詩集『幸ある家』を除き、ほぼ全作品が日付まで）判明している。初期詩篇では、①ロシア国立「文学芸術文書館」(РГАЛИ モスクワ）所蔵の二度目の妻アンナ・ホダセヴィチ（チュルコワ）旧蔵文書、および、②コロンビア大学図書館（ニューヨーク）バフメチェフ・アーカイヴ所蔵のカルポヴィチ文書に含まれる三度目（ただし事実婚）の妻ニーナ・ベルベロワ旧蔵文書中の詩人本人作成（一部ベルベロワの母親代筆）「ホダセヴィチ詩リスト」が、執筆時期の情報を含む。盛期詩篇では、上記②のほか、『1927年版ホダセヴィチ詩集』（本稿の本文第二節を参照）収録詩篇については、③イェール大学バイネキ稀覯書・手稿図書館（ニュー・ヘイヴン）所蔵のベルベロワ旧蔵当該詩集刊本の各詩篇下部に、ホダセヴィチ自身が手書きで日付（確認できる限り極めて正確な）等の情報を加筆している。*Ходасевич-8*. C.349. および *Ходасевич-1*. C.358-359 参照。

Она не знала сказок и не пела,
Зато всегда хранила для меня
В заветном сундуке, обитом жестью белой,
То пряник вяземский, то мятного коня.

Она меня молитвам не учила,
Но отдала мне безраздельно всё:
И материнство горькое свое,
И просто всё, что дорого ей было.

Лишь раз, когда упал я из окна,
Но встал живой (как помню этот день я!),
Грошовую свечу за чудное спасенье
У Иверской поставила она.

И вот, Россия, «громкая держава»,
Ее сосцы губами теребя,
Я высосал мучительное право
Тебя любить и проклинать тебя.

В том честном подвиге, в том счастьи песнопений,
Которому служу я в каждый миг,
Учитель мой — твой чудотворный гений,
И поприще — волшебный твой язык.

И пред твоими слабыми сынами
Еще порой гордиться я могу,
Что сей язык, завещанный веками,

Любовней и ревнивей берегу...

Года бегут. Грядущего не надо,
Минувшее в душе пережжено,
Но тайная жива еще отрада,
Что есть и мне прибежище одно:

Там, где на сердце, съеденном червями,
Любовь ко мне нетленно затая,
Спит рядом с царскими, ходынскими гостями
Елена Кузина, кормилица моя.

（無題）

母ではなく、トゥーラの農婦の
エレーナ・クジナに私は養われた。彼女は
私の襁褓（むつき）を暖炉にかけて温め
寝る前には悪夢を見ぬよう十字を切ってくれた。

彼女は民話を知らず、歌うこともなかったが
そのかわり、ブリキを張った先祖伝来の貴重品箱に
ヴャジマの糖蜜菓子（ブリャニク）や馬形のハッカ菓子を
私のためにいつも入れておいてくれた。

彼女は祈りの仕方は教えなかったが
全てを惜しげもなく私に与えてくれた、
自らの痛ましき母性、そして
自身にとって大切なもの全てを。

あるとき私が窓から落ちたが
死ぬことなく立ち上がると（その日の記憶の鮮烈なこと！）、
一命をとりとめたお礼にと、彼女は半コペイカの蝋燭を
イーヴェルスカヤ礼拝堂に供えたのだった。

そう、ロシアよ、この「威容とどろく大国」よ、
あのひとの乳首をしゃぶりながら私は、
おまえを愛して呪う
辛い権利を吸い取ったのだ。

時を分かたず私の奉仕する
誉れある偉業、うたの幸せにおいて、
わが教師となるのはおまえの宿す奇跡の力、
その舞台は魔力あるおまえの言語。

そして、おまえの虚弱なる息子らを前に
私はまだ時おり誇ることができるのだ、
幾世期もの遺産であるこの言語を
私はますます愛して熱烈に守り育てているのだと……

歳月は走り去る。将来が不要となり
過去が胸の内で焼き尽くされた今となっても、
私には寄る辺が一つあるのだという
ひそかな喜びがまだ生きている。

その寄る辺では蛆に食われた心臓に
私への朽ちることなき愛情を抱きつつ、
皇帝のホディンカの客人らと並んで

わが乳母エレーナ・クジナが眠るのだ。

全文［124-125］

ヴラジスラフ・ホダセヴィチは1886年露暦5月16日、モスクワの中心街に生まれた。農奴解放の敢行にも関わらず急進左翼勢力に暗殺された父帝の教訓から強権政治に回帰するアレクサンドル三世の統治下で、ロマノフ朝帝政ロシアが最後の澱んだ政治的無風と経済的安定を享受する「1880年代」の只中である。

詩人は六人の兄弟姉妹のうち、ひとり齢の離れた末子であった。そして、彼はロシアに生まれ育ちながら、ロシア人の血を一滴も引いていない（ただし国籍は亡命後に喪失するまでロシアである）。[4] 父親フェリツィアンはポーランドの士族（シュラフタ）の末裔であり、青年期にロシアに渡り画家を志すが、結局断念して写真家を経て、詩人の出生当時はロシアではまだ珍しい写真用品店をモスクワ都心で営んでいた。母親ソフィアはユダヤ人であり、著名なジャーナリストのヤーコフ・ブラフマン（Я.А.Брафман 1825?-1879. ロシア正教に改宗してユダヤ人社会の旧弊を糾弾し物議を醸す）を父に持つが、何らかの事情で本来の家庭の外で育ち、その際にカトリックに改宗した。詩人が幼い頃のホダセヴィチ家は、訛りのないモスクワ流のロシア語に加え、ポーランド語も会話に用いる家庭であった。[5]

ホダセヴィチの血筋については、もうひとつ注意を払わねばならない。彼の血筋は父系・母系とも、当時のロシアでは虐げられた民族のものである。ポーランド王国は18世紀後半の周辺国の侵略「ポーランド分割」で消滅し、第一次大戦後の独立回復まで国土の東部などがロシアに併合されていた。また、寛容な受入政策のためユダヤ人の安住の地だったポーランド王国が消滅すると、彼らの多くは国土とともにロシア帝国に編入される。詩人の誕生よりやや前の1880年の統計では、全世界のユダヤ人1200万人のうち、ほぼ半数がロシア

4　*Берберова Н.Н.* Курсив мой. Автобиография. М., 1996. С.267.
5　*Шубинский.* С.7.

在住だった。[6] ロシアでのユダヤ人の待遇は苛烈であり、彼らは居住地域の制限などの公的差別のほか、主な居住地である帝国南西部では民衆レベルによるポグロム（ユダヤ人への集団的暴力行為を指すこの語は、元々は「破壊」を表すロシア語 погром である）に耐えねばならなかった。確かに、ホダセヴィチの育ったモスクワではポグロムは身近な事件とはいえないが、ただし、それがロシア帝国内で最も頻繁に発生したのは、彼の思春期にあたる 19 世紀末なのである。そうした経緯から、ホダセヴィチは自身の民族的出自を強く意識して生きるのであり、成長後はユダヤ系ロシア人の文学者らと親密な交友をもつほか、ポーランド語あるいはヘブライ語詩人の作品をロシア語に翻訳する事業にも、ヘブライ語話者の下訳の助けを借りつつ参画している。

ただし、一見奇妙なのだが、ホダセヴィチはロシアに対して複雑な思いを抱く一方で、ロシア文化を深く愛し、文学者としての自己をはっきりとロシア文学の担い手とみなしていた。掲げた詩のテクスト（第五連）を引用すれば、彼はロシアを「愛して呪」ったのである。彼の私的な書簡には出自をめぐる鬱屈が時おり顔を覗かせるのだが、詩作などの公的な文筆活動でそうした鬱屈があからさまに記されることはなく、まれに気配を窺わせる程度である。ホダセヴィチにとってユダヤやポーランドの文化と、ロシア文化は等しく貴重なのであり、それゆえに彼はロシア語を表現手段としてロシア文学に生涯を捧げる道を、躊躇なく選ぶことができた。

なぜホダセヴィチは民族間の憎悪の深みにはまることなく、ロシア文化への愛情を保ちえたのだろうか。多数者に迎合してロシア社会を楽に生きようとする処世術が理由でないのは、明らかである。もしそうだと仮定するなら、革命を機にロシアを離れた後の彼が、亡命先でロシア文化の断絶への危惧をますます強め、次世代へのその継承を訴える論陣を張ったという事実の説明がつかないのである。ロシアへの彼の愛着を説明できそうな要因の一つは、最も習熟す

6　ロジャー・パルバース（上杉隼人 訳）「ポーランド最後のユダヤ人――I・B・シンガーの失われた世界」（柴田元幸　編著『文字の都市――世界の文学・文化の現在 10 講』、東京大学出版会、2007 年）179 頁を参照。

る言語がロシア語だったということであり、確かに、韻律や脚韻などの作詩技法をとりわけ重視した彼の場合、特性を熟知する言語以外で詩を書くという選択肢は無かったはずである。だが、彼が積極的にロシアへのわだかまりを乗り越え、その文化を強烈に愛そうとまでした理由の全てを、単なる作詩技術上の必要性に帰すのは無理だろう。そもそも、彼はもし望むなら、ロシア語を用いつつ内容はロシアと関わりの薄い詩を書くこともできたはずなのだが、実際は、そうしなかったのである。だとすれば、考えられる要因として最も妥当なのは、ホダセヴィチ文学の核心が「個人の尊厳」にあるという点だろう。つまり、彼が詩や各種著作の中でロシアについて触れるとき、その関心は国家や政治上の集合体としてのロシアではなく、そこに生きる個々の人間――つまり、戦火や革命を生き抜く市井の人や、詩人自身もふくめ筆ひとつで物理的な逆境や政治的弾圧に抗おうとする文学者の生き方にある。このような関心から個々人の生き方を見つめようとするホダセヴィチにとって、世紀の変わり目から革命前後までの激しく動揺するロシアは、極めて興味深い登場人物に溢れる舞台にほかならず、そして、そのさい詩人にとって重要だったのは彼ら登場人物の人間性であって、その民族的属性はほぼ無意味だったのである。

人間個人への関心を全ての上位に置くホダセヴィチの文学観の確立は生涯の最初期、すなわち出生時の生命の危機と、乳母エレーナ・クジナの献身にさかのぼる。掲げた詩篇のテクストを読んでゆこう。第一連、「母ではなく、トゥーラの農婦の／エレーナ・クジナに私は養われた。彼女は／私の襁褓（むつき）を暖炉にかけて温め／寝る前には悪夢を見ぬよう十字を切ってくれた」。――詩人は未熟児として生まれ、当初は舌の腫瘤で授乳も困難だったために乳母のなり手が見つからなかった。育たないから時間の無駄だと、皆が断ってしまう。ただ一人この役割を引き受けたのが、モスクワ南方トゥーラ県（詩人の父親が以前トゥーラ市で写真館を経営したという地縁がある）の農婦クジナであった。[7] クジナの懸命の看護で詩人は一命をとりとめるのだが、乳母（第五連のとおりクジナは

7　今日ではトゥーラ州（область）だが、帝政時代は県（губерния）である。

単なる養育係ではなく授乳をした）を頼まれる以上、彼女にも自分の乳飲み子がいた。この子供は詩人の看護が始まると養育院に預けられ、そのまま命を落としてしまう。養育院といえば聞こえはよいが、当時のロシアのそれが実はどんなものであったのかは、ドストエフスキーの掌篇小説『キリストの樅の木祭りに召された少年』（1876）にも描かれるとおりである（「また別の子たちは、養育院のフィンランド女に授乳されている最中に窒息死し」）。[8] 悲劇はやがてホダセヴィチの知るところとなり、彼は自分の身代わりとなって死んだ子供の存在を意識しながら生きるようになる。詩人の覚書には次のようにある。

> 二番目の子供を彼女は養育院に預け、子供はそこで死んだ。そこでは子供を殺していたのである。私が生きていられるのは、その子のおかげだ。なにしろ、彼女以外の乳母は皆が断ってしまったのだから。それほど私は虚弱だった。クジナが死んだのは、私が 14 歳くらいの時だ。ずっと私たちの家に住んでいた。[9]

クジナは授乳者の役割を終えた後も養育係として長くとどまり、幼い詩人に好ましい感化を及ぼした。作品の第二連、「彼女は民話を知らず、歌うこともなかったが／そのかわり、ブリキを張った先祖伝来の貴重品箱に／ヴァジマの糖蜜菓子や馬形のハッカ菓子を／私のためにいつも入れておいてくれた」。――これは、近代ロシア文学の父とされる詩人プーシキンを念頭に置く詩句である。広く知られる事実であるが、19 世紀初頭、ロシア貴族の多くがフランス語を常用して母国語を農民の言葉だと蔑むなか、貴族として生まれた幼いプーシキンは農婦出身の養育係アリーナ・ロジオーノヴナから民話や民謡を聴き、はじめてロシア語の美しさに目覚める。ホダセヴィチはこのアリーナに乳母クジナを、そして偉大な先達として敬愛するプーシキンに自身を重ねている

8　訳文は次による：ドストエフスキー『白夜／おかしな人間の夢』（安岡治子 訳、光文社古典新訳文庫）、144 頁。

9　ベルベロワ旧蔵『1927 年詩集』（本稿の脚注 3 を参照）中の当該詩篇（69 頁）下部の作者自身による書き込み（*Ходасевич-8*. C.407. 等で公刊）。

（曾祖父からアフリカ系の風貌を受け継ぐプーシキンも、非ロシアの出自を日々意識せねばならなかった詩人である）。朴訥なクジナは、古き時代のアリーナとは違って民話や民謡を語り聞かせはしなかったのだが、まさにその農婦らしい朴訥さ、草原と土の香りのする寡黙な愛情が、幼いホダセヴィチを魅了した。引用した詩句の後半、ヴャジマとはモスクワ西方の平原に位置して、中世に遡る歴史とナポレオン侵攻の際の激戦で知られる小都市である。その名産である糖蜜菓子（プリャニク）は、素朴な甘味をもつ庶民の食べ物として古来より知られる。これらの風物も示すように、詩人にとってクジナはロシアの一般民衆を体現する存在であり、彼女から注がれた無償の愛情が詩人のロシア観、さらには人間観を決定づけた。第三連、「彼女は祈りの仕方は教えなかったが／全てを惜しげもなく私に与えてくれた、／自らの痛ましき母性、そして／自身にとって大切なもの全てを」。――これはもちろん、実子を失った悲しみを他人の子への愛情へと転化させたクジナの心根のことをいう。祈りを教えなかったとあるが、これは詩人が実母にカトリックの信徒として育てられたので、ロシア正教の祈祷作法を教えるわけにはいかなかったのである。[10]

幼少期のホダセヴィチはさらにもう一度、死の瀬戸際に立つ。第四連、「私が窓から落ちたが／死ぬことなく立ち上がると（その日の記憶の鮮烈なこと！）、／一命をとりとめたお礼にと、彼女は半コペイカの蝋燭を／イーヴェルスカヤ礼拝堂に供えたのだった」。――自宅内のクジナの部屋で遊んでいた詩人は、一階とはいえ半地下階の上で高さのある窓から庇伝いに誤って中庭に転落し、怪我は免れるが、落ちながら見た上下転倒する世界は、異様かつ鮮やかな映像として彼の記憶に刻まれた。クジナは直ちに、近所の「赤の広場」にあるロシア正教礼拝堂に詩人と赴き、このときばかりは詩人にも祈らせた。[11]そして、彼女の捧げる感謝の祈りに、幼い詩人はまたしても、自分が生きていることの不思議を思わずにはいられなかった。人の命は儚いゆえに貴重なのだ

10　*Ходасевич-8*. С.407.

11　詩人自身が 1933 年に執筆した覚書「幼年時代：自伝断章 Младенчество: Отрывки из автобиографии」。*Ходасевич-4*. С.203-204.

ということ、人はしばしば他人の犠牲のうえに生きていること、そして、人は時として他人のために進んで犠牲となりうること――ホダセヴィチは幼くしてこれらを実体験として学ぶのであり、その結果、人間への強い興味が彼のうちに自ずと定着した。なお、ホダセヴィチの生涯はその後も病の連続であり、彼は命の貴重さを絶えず反芻することになる。虚弱体質を心配して肉料理に偏る食事を与え続けた両親の配慮は裏目に出て、詩人は大変な偏食家となる。魚介や野菜をほとんど受けつけない極端な食生活が影響したのか、青年期以降、彼は慢性皮膚炎である癤腫(せつ)症（フルンクロージス）や湿疹、さらに胃腸、肺、脊椎の病に悩まされた。[12]

第五連、「そう、ロシアよ、この『威容とどろく大国』よ、／あのひとの乳首をしゃぶりながら私は、／おまえを愛して呪う／辛い権利を吸い取ったのだ」。――先にも触れた、ロシアを「愛して呪う」という詩句はこの箇所である。出自の問題に加え、この詩句の執筆時点でソビエト当局の言論弾圧が身辺に迫る気配を察知してもいる詩人には、この国を呪うだけの十分な理由があった。だが、クジナの面影を思い浮かべるとき彼は、彼女が生きたこの国を愛さずにはいられない。愛憎を同時に抱える「辛い権利」に詩人は苦しむのだが、この苦悩から彼の最良の詩が生まれるのである。なお、テクストの前半、「威容とどろく大国」とはプーシキンの物語詩『ジプシー』からの引用である。[13] ローマ帝国の栄光を物語る先達の詩句を引きながら、ホダセヴィチはローマ衰亡にロシア帝国の滅亡を重ねて描くのである。

第六連以降、「（ロシアよ、わが詩業の）舞台は魔力あるおまえの言語」、「幾世期もの遺産であるこの言語を／私はますます愛して熱烈に守り育てているのだ」。――先述のように、ホダセヴィチのロシア文化、特にその言語文化への愛情は年とともに深まり、ついには革命という伝統文化断絶の危機を経て、文化の継承者としての自己意識へと発展する。彼の主張によれば、プーシキン以来の豊穣なロシア文学の遺産に触れることは、人間の多様性と個人の尊厳を想

12　*Шубинский*. С.22.
13　*Ходасевич-8*. С.407.

起することにほかならない。「将来が不要となり／過去が胸の内で焼き尽くされた今となっても、／私には寄る辺が一つある」。――ロシア革命により過去の価値観は否定され、多くの人物や事物が失われた。一方、ソビエト政権は集団への個の従属を声高に唱えはじめ、将来は全く見通せず、考えても無駄という状況である。だが、たとえ何が起ころうとも、詩人の胸中からクジナの面影、つまり自身の文学の原点だけは消え去ることがない――ホダセヴィチはそう宣言するのである。

最終連、「その寄る辺では蛆に食われた心臓に／私への朽ちることなき愛情を抱きつつ、／皇帝のホディンカの客人らと並んで／わが乳母エレーナ・クジナが眠るのだ」。――モスクワ市内の北西部に位置する広場「ホディンカの野」は、ロシアの災害史で最大級の惨事によって記憶される。詩人の十歳の誕生日から二日後の 1896 年露暦 5 月 18 日、ロマノフ朝最後の皇帝となるニコライ二世の戴冠を祝おうとこの広場に押し寄せた大群衆が、頭上にばらまかれた祝儀の菓子をきっかけにパニックに陥り、ほぼ一瞬にして千数百名の一般市民が圧死する。この事故は結果としては、血の日曜日事件（1905）、第一次大戦（1914-18）、ロシア革命（1917）と続く膨大な命の犠牲の先触れとなった。この一節では、新帝即位の祝賀の場で犠牲になった無名の人々が「皇帝の客人」という言葉で表現され、あたかも彼らが口承文芸における英雄譚の主人公であるかのように描かれている。このように、ホダセヴィチが自分の文学の主人公に据えたのは、まさに小さな個人なのである。

2. 初期ホダセヴィチ詩の成立背景

ホダセヴィチの生涯最初期の重要な出来事について、後の詩風も考慮しながらまとめてみた。つづいて初期作品を読む前に、時計の針をやや進めて彼が実際に詩人となる経緯と、初期詩篇の具体的な成立背景を概観する必要があるだろう。

ホダセヴィチが最初の“詩”（二行詩）を書いたのは、自身の回想によれば六

歳頃のことである。[14] 幼少期の詩人をめぐってもう一つ特筆すべきなのは、ボリショイ劇場で一度バレエに触れ（以降はバレエ狂になる）、本人の述懐によればその際に「音楽は記憶に残らず」、舞台上の踊り手の動きに魅了されたという出来事である。[15] 視覚的要素への関心は、先行研究もよく指摘するように写真業という家庭環境に由来するのかもしれないが、他方、大音量の華美な音楽への関心の薄さは、これから見てゆく彼の詩の特徴と関係するのかもしれない。

さて、名門のモスクワ第三中等学校（ギムナジヤ）（詩人の在籍当時は古典ギリシア語やラテン語など古典的教養教育に注力する学校だった）[16] をまずまずの成績[17] で卒業したホダセヴィチは 1904 年秋、モスクワ大学法学部に入学する。そして、この直後にロシア前期象徴派の指導者である詩人ブリューソフに招かれて文芸サークル「水曜会 Среды」に加入したことが、彼の人生を決定づけた。本格的に詩作に着手したホダセヴィチは、翌 1905 年にはモスクワの文芸年鑑『グリフ』に最初の作品を発表して詩壇デビューを果たし、さらに同じ年にはモスクワ大学でも文芸領域を扱う「歴史・文献学部」に転部したほか、文芸サークルで知った裕福な名家の令嬢マリーナ・ルィンジナと結婚もして、執筆ペースも急加速する。象徴派の雑誌『金羊毛』や『峠』に精力的に寄稿する（後者では編集部の書記も務める）のも、この頃である。ところが 1907 年には、詩人は学費未納のため大学を退学するばかりか、年の瀬の 12 月 30 日にはルィンジナが気鋭の文芸評論家セルゲイ・マコフスキーのもとに走り、生涯四度のうちの最初の結婚生活が破綻してしまう（なお、大学には翌年に復学するが、結局 1910 年に同じ理由で退学している）。

1908 年 2 月、ホダセヴィチの第一詩集『青春 Молодость』（35 篇を収録）が刊行される。生前刊行の全ての彼の詩集と同様に、収録作品の選択・配列とも

14 「幼年時代：自伝断章」。*Ходасевич-4*. С.205.
15 同書。*Ходасевич-4*. С.196.
16 *Шубинский*. С.37.
17 *Муравьева*. С.48.

に作者が決定する、完全な自選詩集である。ルィンジナの出奔が突然だったために印刷所への連絡が間に合わず、巻頭にはこともあろうに彼女への献辞が印刷されてしまうのだが、人生のさらなる急転回を前に、詩集がひとまず完成をみたのは幸運であった。1909 年、詩人は二度目の結婚相手となるアンナ・チュルコワと出会う。しかし、翌年には彼は結核を発病し、1911 年夏に治療のためエヴゲーニヤ・ムラートワ（彼女との恋は短期間で終わる）を伴いイタリアを旅行する。この年の秋に交通事故で詩人の母親ソフィアが亡くなり、初冬には父親フェリツィアンも急死する。このときから詩人はチュルコワと同居を始め、彼の最初の離婚が法的に成立してからロシア正教会の定める 3 年間の謹慎期間を経た 1913 年末に、二人は結婚する。なお、この間に詩人は、ポーランド語からロシア語への翻訳活動にも携った。すなわち、「ポーリザ」出版社の依頼で散文を翻訳し（1908）、さらに他の出版社の依頼で、ポーランドの大詩人ジグムント・クラシンスキの作品集の翻訳も試みる（1912）のだが、後者は刊行されずに終わった。

第一詩集に倍する六年間の苦吟を経た 1914 年 2 月、ホダセヴィチの第二詩集『幸ある家 Счастливый домик』（第一詩集とほぼ同数の 36 篇を収録）が上梓される。これは前の詩集の刊行後に執筆された作品を精選したものであり、収録作品の内容はムラートワ、チュルコワのほか、象徴派の群小詩人でユダヤ系のサムイル・キッシン（筆名ムニ）の存在を反映する。キッシンは、1905 年にホダセヴィチと知り合ったのち 1910 年代初頭から深い親交を結ぶ人物であり、両親の喪失と自らの病気に鬱々とする詩人をチュルコワとともに支えるのだが、この心優しい親友は第一次世界大戦に徴兵されると戦地の悲惨に耐えられず、無名のまま自殺することになる。

ホダセヴィチの創作史でいう初期詩篇とは、この第二詩集までを指すのが普通である。実際、彼は生前最後の自選詩集であり、発表済みの詩集（第三詩集『穀粒の道を』、第四詩集『重い竪琴』）も加筆修正のうえ再録した『ヴラジスラフ・ホダセヴィチ詩集』（1927）に、第二詩集初版までの作品を全く収録していない。初期ホダセヴィチ詩篇の特徴としては、青年らしい瑞々しく、ときに悲痛な感

受性と、すでに完成の域にある韻律などの作詩技術のほか、象徴主義の影響が挙げられる。ブリューソフとの濃密な師弟関係と、ロシア象徴主義運動の中心の一つ「水曜会」の詩人たちとの交流のもとで執筆された以上、初期ホダセヴィチ詩の作風に象徴主義的な傾向が認められるのは当然であり、この点で彼の初期詩篇は、既存の文芸潮流から完全に自立する盛期詩篇とは作風を異にする。1927 年の詩集から初期詩篇が排除された主因も、この点にあるだろう。

ただし、これは軽視されがちなのであえて強調したいのだが、ホダセヴィチの初期詩篇を、ロシア象徴主義の本流とされる詩人たちの作品と同列に扱うことはできない。なぜなら、象徴主義運動の中心部分をホダセヴィチが担うことは結局、一度もなかったからである。彼が初めて詩を発表するのは先述のとおり 1905 年だが、この時点ですでにロシア象徴主義運動は終焉に近づいている。つまり、ホダセヴィチは明らかに“遅れてきた象徴派詩人”だった。少し長くなるが、彼自身の述懐を以下に引用しておく（文中［　］は引用者注）。

> きわめて重要な私の特質――それは、せっかちなことだ。そのために私は人生で多くの嫌な目に遭ってきたし、絶えず苦悩してきた。おそらく、この性急さは、生まれるのが遅すぎたので、無意識のうちに常に遅れを取り戻そうとすることに起因するのだろう。長兄は私より 22 歳も年上で、最も歳の近い姉でも 11 歳離れているのだ。私の出生時点で父は 51 歳、母は 41 歳だった。家庭での私は、ベニヤミン［旧約聖書におけるヤコブの 12 番目の息子］さながら、あるいは余った練り粉で焼いた菓子さながらの可愛がられようだった。私はせっせと気を遣われ、甘やかされ――これら全てが、私の健康や性格、さらにいくつかの習慣にさえ、かなり悪い影響を及ぼした。［…中略…］
>
> 遅く生まれたことは、文学でも私の邪魔をした。もし 10 年早く生まれていれば、デカダン派［ロシア前期象徴派の別称］や象徴派［ブロークらロシア後期象徴派のこと］と同年代だった。つまり、ブリューソフより 3 歳ほど若く、ブロークより 4 歳ほど年上だったはずなのだ。実際には、私が詩壇に立ったのは、同時代の最も重要な潮流はすでに命脈が尽きはじめる一方、新しい潮流が現れるのはまだ先、と

いう時期である。私とは同世代のゴロデツキーやグミリョフも、同様に感じていた。彼らはアクメイズム［神秘性を排し象徴主義の超克を目指したロシアの文芸運動。有力詩人多数が関係］を創始しようとしたものの、この流派からは本質的には何も生まれず、名称以外には何も残らなかった。私と、さらに若いツヴェターエワは、象徴主義を離れた後は何者にもつくことなく、ずっと孤立して「野良」のままだった。文学史家やアンソロジーの編者らは、私たちをどこに押し込めばよいのか分からないのである。

（「幼年時代：自伝断章」1933）[18]

フランスのそれに倣い 1890 年代に始まるロシア象徴主義運動は、首都ペテルブルクでのメレシコフスキーの詩集『象徴』（1892）、モスクワではバリモントの詩集『北国の空の下で』（1894）、ブリューソフらの詩文集『ロシア象徴主義者』（1894-95）等を嚆矢に、たちまち文壇を席巻する。小説中心だった 19 世紀後半のロシア文学から一転して詩のジャンルに軸足を置き、奔放な幻想や、めくるめく南の異国の情景を描いた象徴主義運動は批評家や読者大衆を驚かせ、当初は悪意から「デカダン派」とも呼ばれた（今日では「前期象徴派」が呼称として一般的である）。象徴主義運動は、「血の日曜日事件」でペテルブルクの市民多数が帝政当局の軍部隊により殺害され世情が一気に不穏になる 1905 年頃（つまりホダセヴィチが詩壇に立つ前後）には、社会情勢を反映し、あるいは長期にわたる活動で内的エネルギーを使い果たし、神秘性や宗教性に活路を求め後期象徴派を形成する。ブロークとベールイという巨星を擁して文学史に大きな足跡を残す後期象徴派だが、その命脈は短く、1910 年頃には象徴主義運動そのものが収束して、同派の詩人らは新たな主題と活動領域を求めて各々の道へと散開してゆくのであった。

前期象徴派が行き詰まって運動が変質する中で詩人となり、文学界の動向に乗り遅れたという焦燥に駆られるホダセヴィチは、自ら認める「せっかち」な

18　この覚書については本稿脚注 11 も参照。*Ходасевич -4*. C.190.

性格を最大限に発揮して、充実した第一詩集を約 3 年間で完成させるものの、その後わずか数年で、今度は象徴主義運動そのものが瓦解してしまう。つまり、それまで十数年にわたり蓄積された象徴派の理念と経験を深く共有して自身の詩作に生かすだけの余裕は、ホダセヴィチには到底無かったのである。ただし、創作上の理念は別として、象徴派時代に交流をもった文学者たちの言動は彼にとって大きな刺激となり、それは後半生の代表的著作となる回想記『ネクロポリ Некрополь』(1939 刊行) に書き残されることになる。

詩風の上で象徴主義に染まりきれなかったことは、結果的にはホダセヴィチには幸運だったというべきだろう。柔軟な発想力や精彩ある表現など、詩人としての技術の基本を象徴派に学びながらも、幼児期から育んだ自らのテーマを見失わずにすんだからである。初期ホダセヴィチの“象徴詩”では、主たる関心の所在は、現実世界の背後に存在するという象徴派的な妖しき別世界ではないし、人が地上のしがらみと個人の殻を脱ぎ捨ててその別世界に融合してゆく快感でもない。ホダセヴィチが詩で描こうとしたのは現実の地平で展開される個人のドラマ、個人の内奥なのだが、具体的には後ほど実作品でみてゆこう。

上掲の覚書「幼年時代」で自ら述べるように、象徴派の瓦解後においてホダセヴィチは、ベールイやゴーリキーら文壇の巨人たちと交流しつつも、特定の流派に深く関与せずに、作風上の孤高を保つことになった。詩人の述懐に一言つけ加えるなら、ポスト象徴主義の重要な文芸運動アクメイズムに対して彼が極めて冷笑的であることについては、その拠点となったペテルブルクの雑誌『アポロン Аполлон』の創刊発案者で編集長も務めた人物が、前妻ルィンジナの新たな夫マコフスキーだったという、生身の人間ならではの事情も考慮せねばならないだろう。ただし、このことはホダセヴィチに孤高の道を歩ませた要因としては副次的なものにすぎず (彼は『アポロン』にも寄稿はしている [19])、もし

19　確認できる範囲では、詩は 1910 年第 8 号に後に『幸ある家』に入る 3 篇、1914 年第 10 号に戦争 (第一次大戦) を批判する詩「鼠の詩から Из мышиных стихов」を 1 篇。散文は 1915 年第 3 号に評論「プーシキンのペテルブルク小説 Петербургские повести Пушкина」。『アポロン』(1909-17) は象徴派の雑誌として創刊ののちアクメイズムの拠点となるが、どちらの時期も寄稿していたことになる。

身辺の事情が違ったとしても結局、彼は作風上の孤高を守ったはずである。なぜなら、すでにみたように、ホダセヴィチは流派や運動から育った詩人ではなく、出生の時点から自らの創作のテーマを抱え、生涯それを追究するタイプの詩人だったからである。

3. 初期ホダセヴィチ詩の諸相

これまでに検討した執筆背景や創作上の問題を踏まえ、初期ホダセヴィチの代表作であると論者の判断する作品を読んでゆこう。掲げる作品は、特に注記のない限りは第一詩集『青春』から選んでいる。第二詩集『幸ある家』の作品については、キッシンらとの交友の影響も踏まえて別稿で詳しく考察する必要があるだろう。

『青春』は二部構成をとり、第一部には「私の国で В моей стране」、第二部には「従姉妹 Кузина」という標題がある。前者は巻頭詩篇「私の国で」(1907) の名から採られ、後者はこの場合は詩神 (ロシア語では女性名詞 Муза) を指すとされるが、[20] 語源上は無関係ながら姓がたまたま同じ綴りの乳母クジナ Кузина へのオマージュも含むはずである (「従姉妹」を指す語としてはやや古風な кузина をあえて用いた理由はそれだろう。ただし、クジナはこの第二部の明瞭な主題ではない)。

巻頭詩篇「私の国で」は明らかに初期の代表作の一つだが、紙幅の都合から本稿では概略だけを紹介しておく。作品の舞台は、国土が灰に覆われて一年を通して陰鬱な秋だという架空の国であり、そこに暮らす人々の惨めな生活や、農地に蒔かれたまま発芽せずに地中で死んでしまう種子が描かれる (この種子のイメージは、1917 年に書かれる盛期の代表的詩篇「穀粒の道を Путем

20　続刊の詩集『幸ある家』収録の詩「詩神に К музе」(1910) で、作者自身が標題「従姉妹」の含意を明かしている。「薔薇色の、軽やかな、無垢な微笑みを浮かべた君は／身近で親しいものに思われたので／私はたわむれに君を従姉妹と呼んだ。／ああ、いとしき詩神よ！」。*Ходасевич-1*. С.365. も参照。

зерна」の原型となる)。幻想的な筆致の中にも、ロシアの現実が暗示され、前世紀半ばの農奴解放令の後も境遇に大きな改善をみない農民たちや、おそらくユダヤ人も含むのであろう虐げられた人々に脚光が当てられ、立場の弱い人々や、ひとり苦しむ人への関心が詩集全体の重要な主題であることが、端的に示されるのである。

以下に掲げる作品はそうした巻頭詩篇の主題を引き継ぐものだが、直接の描写の対象は現実のロシアの自然となる。1906 年 11 月半ばに最初の妻ルィンジナの伯父 I・A・タルレツキーの所領であるモスクワのはるか北西、ノヴゴロド県リジノで執筆され、いったん発表された後、『青春』第一部に収められた。[21] なお、『青春』の収録作品のうち約半数がリジノで書かれている。

・・・　　(無題)

Один, среди речных излучин,	川の曲がりかどに独りたたずみ
При кликах поздних журавлей,	晩秋の鶴たちの鳴く声のもと
Сегодня снова я научен	きょう、私はまたもや学んだのだ、
Безмолвной мудрости полей.	広野の無言の叡智を。
И стали мысли тайней, строже,	思いはますます秘められて厳しく
И робче шелест тростника.	葦の葉擦れもさらにおずおずとする。
Опавший лист в песчаном ложе	砂地の川底に落ちたひとひらの葉を
Хоронит хмурая река.	暗い顔をした川が葬ろうとする。

全文 [31]

韻律はプーシキンいらいロシア詩の王道とされる四脚弱強(ヤンブ)脚、脚韻は女性韻と男性韻からなる交差韻で一貫し、目立った破格もないため滑らかで静謐な音

21　*Ходасевич-8*. С.31, 355.

調である。光景はリジノ近辺だろうか。露暦 11 月半ばなら既に厳しい雪景色だが、記憶をたどり描かれるのは去ったばかりの短い晩秋である。白樺林が黄に染まる「黄金の秋」も終わり針葉樹の暗緑が浮き立つ広野を、川は弧を描いて悠然と流れ、地平線へと消えてゆく。収穫の終わった野良には人影もなく、湾曲してよどむ川の面は葦原が埋めて、水音もない。南への旅路を急ぐ鶴の群れが、ひとしきり空を賑やかにする。ロシア語の原文では、該当する一、二行目に鋭い [i] 音（単語「клик 鳴き声」を構成する唯一の母音）が集中し、この喧騒を再現する（Один, среди речных излучин, ／ При кликах поздних журавлей,）。しかし、鶴たちが飛び去ると、以前に倍する寂しさである。いよいよ冬が来るのだ。この張りつめた気分のなか、詩人はふと眼前の広野に「無言の叡智」が宿るような感覚に捉われる。この感覚は象徴派が好んでうたう神秘的な体験とよく似ており、ある程度それを意識的に踏襲しているはずだが、ただし大きな違いもある。比較のための一例として、象徴派の名作であるブロークの初期詩篇（1901）を掲げよう。原文は省略し、翻訳は小平武による。[22]

（無題）

黄昏（たそがれ）、春の黄昏（たそがれ）
足許の冷たい波
心にはこの世のものならぬ希望
波が砂地に走りくる

反響（こだま）　遠い歌
けれど識別はできない
孤独な魂が泣いている
向こう　彼（か）の岸で

22　小平武 訳『ブローク詩集』、彌生書房、1979 年、15-16 頁。エピグラフも省略した。

[…中略…]
何かが河を走ってゆく

心にはこの世のものならぬ希望
誰かがこちらへ来る――私は走る……
反射　春の黄昏（たそがれ）
向こう岸の呼び声

二人の詩人の作品は川辺で体験した神秘的な一瞬をうたう点では共通する。ただし、現実世界は不可視の本質世界の象徴にすぎないと考えるのが象徴主義の基本であるから、これに忠実な初期ブローク詩篇には、本質世界の顕現（「河を走る何か」、「こちらへ来る誰か」、「この世のものならぬ希望」、「向こう岸の呼び声」）が、うたわれるのである。一方、ホダセヴィチが扱うのは、そうした曖昧で謎めいた別世界（「何か」「誰か」「向こう岸」）に邂逅する喜びではない。彼の詩がうたうのは、現実世界に元々存在はしても小さくて儚いために気づくのが難しい事物であり、そして、偶然にもそれを発見した“神秘的”で幸福な一瞬である。――広野の無音のなかで感覚はかえって研ぎ澄まされ（「思いはますます秘められて厳しく」）、それまで気にも留めなかった葦の葉擦れが聞こえてきた。葦が風にそよぐ音とは、これほど優しいものなのだ。まるで、黙想の邪魔になるのを詫びながら、遠慮がちに囁き合うようではないか（「葦の葉擦れもさらにおずおずとする」）。すると、音響だけでなく、川底で寂しく朽ちてゆく落葉の色や、普段とは違う川の表情までもが見えてくる。初雪も間近な晩秋は厚く垂れこめる雪雲を映して、清流もここまで黒々とするものなのだ（「ひとひらの葉を／暗い顔をした川が葬ろうとする」）。ロシアの秋は、よく知られる華やかな「黄金の秋」だけではない。人生の秋を迎えた初老の人のような、寡黙な中にも穏やかで繊細な横顔がある。――この「沈黙の叡智」の発見をとおして、詩人は自分の採るべき詩風を改めて自覚する。顧みられることのない囁き声や、儚く小さな存在を描くことがホダセヴィチ詩の変わらぬテーマ

であり、それは作品の主題が人であれ自然であれ、同じなのである。

先程のブローク詩とは対照的に初期ホダセヴィチ詩の多く、特に『青春』収録作品の実に約半数は、この詩のように静寂を基調とするに加え、静寂そのものを意味する語（「静寂 тишина, тихий」、「沈黙 молчание, молчать」、「無言の безмолвный」、「聞きとれない неслышно」等々）を明示的に用いるという特徴がある（彼の盛期詩篇でも静寂はなお重要なテーマだが、直接的な表現は避ける）のだが、そうした初期詩篇をもう一つ取り上げておこう。

・・・

Протянулись дни мои,
Без любви, без сил, без жалобы...
Если б плакать — слез не стало бы...
Протянулись дни мои.

　　Оглушенный тишиной,
　　Слышу лёт мышей летучих,
　　Слышу шелест лап паучьих
　　　　За моей спиной.

О, какая злая боль
Замолчать меня заставила.
Долго мука сердце плавила,
И какая злая боль!

　　На распутьях, в кабаках
　　Утолял я голод волчий,
　　И застыла горечь жёлчи

На моих губах.

Я тобой смирён, молчу.
Дни мои текут без жалобы.
Если б плакать — слез не стало бы...
Я тобой смирён. Молчу.

（無題）

わが日々はゆるゆると長びいた、
愛も、力も、不平もなく……
たとえ泣こうとも――涙も湧かなかったろう……
わが日々はゆるゆると長びいた。

静寂に耳をつんざかれて
聴こえるのだ、こうもりの飛翔が、
聴こえるのだ、蜘蛛の摺り足が、
　わたしの背中の後ろから。

ああ、なんと獰猛な痛みが
わたしに沈黙を強いたことか。
長きにわたり苦悩が心を溶解して
そして、なんと獰猛な痛みだ！

四つ辻で、居酒屋で
狼のごとき飢えをわたしは癒した、
胆汁の苦みが
　唇に張りついた。

きみには逆らわない、沈黙しよう。
わが日々は不平もなく流れる。
たとえ泣こうとも――涙も湧かぬだろう……
きみには逆らわない。沈黙しよう。

全文［34］

この詩は1907年5月にやはりリジノで書かれ、そのまま『青春』第一部に発表された。[23] 実生活が暗転する年（ルィンジナがマコフスキーと知り合うのは直前の4月である[24]）の執筆のためか鬱々とした内容だが、ただし、第五連で「きみには逆らわない」と呼びかけられる相手はルィンジナとは限らない。それは、ある種の運命を指すのかもしれないのだ。

さて、ここで注意したいのは第二連である。「静寂に耳をつんざかれ」るという詩句は奇妙だが（оглушен は本来、大音量で一時的に耳が遠くなることをいう）、これは詩作の恩師ブリューソフに倣う表現であり、書斎の静けさの中で脳裏に詩のリズムが流れ出す瞬間を「響きわたる静寂 звонко-звучная тишина」と形容したブリューソフの詩「創造 Творчество」（1895）をほぼ踏襲する。[25] 要するに、この奇妙な表現でホダセヴィチは、詩想がひらめく瞬間に詩人の味わう感覚を描いているのだが、問題はその詩想の中身である。「こうもりの飛翔」や「蜘蛛の摺り足」が聴こえるというのだが、それは一体どんな音なのか。そもそも、こうもりというものは全く羽音を立てずに空を舞い、蜘蛛は音もなく壁を走る生物のはずなのだ。

これはとても神秘的な、いかにも象徴派の好む感覚のように思われるのだが、実際ははるかに時代を遡り、19世紀の大古典であるプーシキンからの部分的引用だということを、ここに指摘しておく。詩を書く苦しみと、その苦し

23　*Ходасевич-8*. C.34, 357.
24　*Шубинский*. C.511.
25　詩「創造」の当該詩句とホダセヴィチの他の接点は次を参照。三好俊介「街路と恋の「結合」：ホダセヴィチ『重い竪琴』とブリューソフ」、『SLAVISTIKA』第25号（2009年）、17-38頁。

みをも上回る文筆への執念をうたってプーシキンの代表作に数えられる詩「預言者 Пророк」(1826) には、次のようにある。――「(六翼のセラフィムが) わが耳に触れれば――／耳はざわめきと響きに満ちて／われは聴く、天のおののく音を、／天使が高みを舞う音を、／海底を這うものたちの足音を、／谷間の蔓草の伸びゆく音を」。[26] 本来は聴こえないはずのものを聴き取るまでの修錬を積んだ者こそ詩人なのだとプーシキンは説き、ホダセヴィチは、近代ロシア詩史の原点で示されたこの主張に共鳴している。ここに掲げたホダセヴィチの詩も、先程の晩秋をうたう詩と全く同様に、微かな声を聴きとり、小さなものを見ようとしているのだ。しかも、こうもりや蜘蛛といった、人の嫌がる生き物にあえて注目する姿勢(プーシキンの詩には得体の知れない海の生物と並び、天使や蔓草も登場するのだが) には、虐げられた存在へのホダセヴィチの眼差し(半ば自分と重ねてもいるのだろう) を、はっきりと読みとることができる。

この詩にはもう一つ、注目すべき特徴がある。それは作中にブリューソフとプーシキンへのオマージュが同時にみられるという事実であり(つけ加えれば、作品冒頭の二行も、アンナ・ケルンに捧げるプーシキンの有名な詩「……に捧ぐ K…」1825 の次の詩句へのオマージュと考えてよい――「わが日々は静かに流れた、／神も、霊感も、／涙も、生も、恋もなく。Тянулись тихо дни мои ／ Без божества, без вдохновенья, ／ Без слез, без жизни, без любви.」) [27]、この点で本作は、ホダセヴィチと象徴派の関係の中でも見落とされがちな側面に脚光を当てている。18 世紀の宮廷文学の流れをくむロシア詩は、19 世紀前半の 20 年余にわたりプーシキンらの活躍で貴族階層を主な読み手として「黄金時代」と呼ばれる隆盛に達した後、識字率の向上やそれに伴う雑階級人の増大という社会の構造的変化の影響で、急速に衰退する。19 世紀後半の小説全盛の時代には、詩はチュッチェフやフェートら少数の詩人を除き、失速状態に陥ってしまう (ホダセヴィチは詩に馴染みはじめた学童時代に当時の有名詩人アポ

26　出典は 16 巻本プーシキン全集：*Пушкин А.С.* Полное собрание сочинений в 16 томах. Т. 3. Кн.1. М., 1948. С.30.

27　出典は前掲の 16 巻本プーシキン全集：Т. 2. Кн.1. М., 1947. С.406.

ロン・マイコフに強く憧れ、偶然出会った別荘地でこの老詩人に話しかけたりもするのだが、[28] 彼は偉大な詩人の範疇に属さない)。この停滞を世紀末に打破するのが、詩人中心の運動体である象徴派なのだが、そのさい彼らは自らの足場を固めるためブリューソフが中心となり、プーシキンら「黄金時代」の詩人たちを再評価し、その研究と読者大衆への紹介に精力的に取り組んだ。いったんは放擲された詩の古典的遺産をロシアの読書人が再び取り戻したのは、象徴派の功績である。ホダセヴィチは象徴派やその周辺での交友を通じて、そうしたロシア詩の古典について深い知識を獲得するのであり、これは結局、象徴主義にもまして大きな影響を彼の生涯に及ぼすことになる。

初期詩篇のうち第二詩集『幸ある家』の詳しい分析は別稿に譲るほかないが、本稿ではこの詩集から一篇だけを紹介しておきたい。それは、三篇からなる連作詩「鼠たち мыши」の一篇で、執筆は 1913 年の秋頃、[29] つまり詩人は既に同居するアンナ・チュルコワとの正式な再婚を年末に控えている。

МОЛИТВА

Все былые страсти, все тревоги
Навсегда забудь и затаи...
Вам молюсь я, маленькие боги,
Добрые хранители мои.

Скромные примите приношенья:
Ломтик сыра, крошки со стола...
Больше нет ни страха, ни волненья:
Счастье входит в сердце, как игла.

28　ホダセヴィチによる覚書「パリのアルバム（VI）Парижский альбом.VI」に記載。*Ходасевич -4*. С.212.

29　*Ходасевич-8*. С.73, 373.

祈り

かつての情熱や胸騒ぎはすべて
永遠に忘れて秘めるべし……
汝らに私は祈るのだ、小さな神々、
善良なるわが守護者たちよ。

つつましい捧げ物を受け取り給え、
食卓で残ったチーズの切れ端だ……
もはや恐怖も不安も消え去った、
幸せが心の中に入ってくるのだ、まるで針のように。

全文［72-73］

舞踏調・民衆歌謡調の韻律とされる強弱格（ホレイ）の使用は、内容と執筆背景に対応する。[30] アンナの回想によれば、彼女が自分の連れ子に歌って聞かせていた鼠の踊りにまつわる歌を詩人が気に入り（詩人が元々好きなのは猫なのだが [31]）、本作を含む連作詩が着想された。実際、婚礼の終わった夜には、台所でウェディングケーキ（正確にはロシア風パイであるピローグ）の残りを夫婦で切り分け、朝までに食べるようにと戸棚の陰の鼠たちに与えたという。[32]

この詩もまた、鼠という卑小な存在への共感が主題の一つである。新婚の幸福を讃える詩ではないことに注意したい。最後の一言で作品全体の意味を逆転させるというホダセヴィチに特徴的な手法が、本作ではすでに用いられている。多幸感に酔いながらも、この幸福が詩作の営みとこのさき両立可能なのかという微かな不安が、詩人の心の片隅を「針のように」、ひんやりと刺している。

30　*Федотов О.И.* Стихопоэтика Ходасевича. М., 2017. С.103. も参照。
31　「猫への愛情は生まれてこのかた続いているが、嬉しいことに彼らとは相思相愛でもある。」（「幼年時代：自伝断章」）。*Ходасевич -4*. С.192.
32　*Ходасевич-8*. С.373.

家庭ならではの穏やかだが単調な日々や、感覚を鈍麻させる日常の物音は、彼のような微かな音響、片隅に生きる人の秘かな慟哭を追究する詩人には、創作の妨げとなるに違いないのだ。偶然に食物を恵まれた鼠の幸福に似て、この幸せは長くは続かないのではあるまいか。――傍らで共にケーキを切る詩人のそんな胸中をアンナが察していたのかは不明だが、詩人の不安はやがて的中してしまう。

本稿を閉じるにあたり、これまでに考察してきた初期ホダセヴィチの詩風を総括すると同時に、彼の作詩技術をよく表す作品を掲げておく。執筆は 1907 年 5 月末のリジノ、最終的な収録先は詩集『青春』第二部である。[33]

PASSIVUM

Листвой засыпаны ступени...
Луг потускнелый гладко скошен...
Бескрайним ветром в бездну взброшен,
День отлетел, как лист осенний.

Итак, лишь нитью, тонким стеблем,
Он к жизни был легко прицеплен!
В моей душе огонь затеплен,
Неугасим и неколеблем.

受動態（パッシヴム）

階段は枯葉で覆われた……
輝きの失せた野はなだらかに刈り取られた……

33　*Ходасевич-8*. С.49, 362.

無限の疾風に深淵へと吹き上げられ
昼は秋の葉のように飛び立った。

つまりは、一本の糸、細い葉柄だけで
昼はこの世界にふわりと繋ぎとめられていたのだ！
私の心に灯がともされた、
消されることも、揺るがされることもなく。

全文［48-49］

ホダセヴィチの師ブリューソフの詩集には一時期までラテン語や古代ギリシア語を書名とするものが目立つのだが、[34] 本作はそのパロディーなのだろうか、ラテン語による文法用語が標題となっている。あるいは、ホダセヴィチは西洋古典語を学ばせる中等学校を卒業しているのだから、自分の学童時代を思い出しながら書いているのかもしれない。詩を書く人が韻律と脚韻を整えるのは、机に向かう学童の苦しみに似ている。

「受動態」という標題は奇抜だが、実際に作中の動詞は一か所（一連最終行の「飛び立った отлетел」）を除いて全てが受動態であり、とりわけ作品末尾の一文には受身の意味を持つ単語（動詞由来の分詞の類い）が三つも含まれる（「затеплен ともされた」、「неугасим 消されない」、「неколеблем 揺るがされない」）という、念の入れようである。詩集『青春』は第一部の内容が重厚であるため、構成上の配慮から第二部（この部の標題 Кузина は詩の女神を指すのだった）には艶やかな軽さのある作品が多く配置されるのだが、ホダセヴィチは本作でこの軽さを、作品の内容に頼らず形式のみで、つまり軽業師的な言葉の技術だけで実現している。なお、日本語訳では原文のこれらの特徴をすべて保存

34　ラテン語：『Juvenilia 若書き』（1895）、『Me eum esse これが私だ』（1897）、『Tertia Vigilia 第三の警護』（1900）、『Urbi et Orbi 都市と世界へ』（1903）。ギリシア語『Stephanos 花冠』（1906）。

するように訳したが、原文はそれに加えて韻律・脚韻をほぼ完璧に守って書かれているのである。

ただし、詩人はただ言葉遊びのためだけに「受動態」に言及するわけではない。彼は実際、誕生以来ずっと受身に生きるしかなかったのである。アレクサンドル三世時代の保守回帰のロシアにユダヤ・ポーランドの混血として生まれ、幼くして死の抗いがたい力を知り、文筆においても転換期の詩壇の混乱に巻き込まれた詩人は、ただ流れのままに生きるよう強いられた。無辜の市民の血が流された 1896 年のホディンカの惨劇も、1905 年の血の日曜日事件も、彼はただ横目で見ているよりほかはなかった。彼は余りにも弱く、何をしても無駄なのであった。ところが、まさに前方が道なき暗闇だと思われたとき、詩人は何者かが自分を後押しするように、灯をかざしてくるのを感じる。――「私の心に灯がともされた、／消されることも、揺るがされることもなく」。灯をともすその手の主が誰なのか、詩人自身にも一言で語ることはできないのだが、それは疑いなく、苦難を生き延びた父祖とその同族の民たちであり、乳母クジナであり、身代わりとなった彼女の子供であり、そして彼らから学んだもの――つまり、小さな個々人の偉大な尊厳を詩に描いていこうという、決して「揺るがされ」ない信念なのだった。象徴派の夢幻の文学が終わろうとするなかで、戦争と革命の 1910 年代のロシア文学へと、ホダセヴィチはこの信念とともに踏み出してゆくのである。

結　び

本稿はホダセヴィチの生い立ちをめぐる事実関係を紹介し、彼の実人生と詩風の関係について独自の考察を行った。この作業を通し、わが国ではほとんど知られない詩人の若年期について、重要な部分を描写することもできたと思う。人間を個人として考えるホダセヴィチの基本的詩風は、波乱に満ちた彼の幼少期にすでに形成されていた。

なお、彼のこの基本姿勢は、のちにソビエト国家の政治的要求と正面から対

立することになる。誤解のないよう断っておくと、ホダセヴィチは亡命はしているが、特定の政治的立場に強く傾斜するタイプの文学者ではない。帝政ロシアで貴族階層に属したことはなく、[35] 政治的理念ゆえに当初から革命を嫌悪したという事実もない。ホダセヴィチはただ、あまりにも無造作に個人の血が流されてゆく革命の現実と、集団のために個を犠牲にするというソビエトの発想が、本稿でみたような自身の文学的原点に照らして、どうしても受け入れられなかっただけなのである。ホダセヴィチの生涯を通じた、個人をめぐる主題の発展は興味深い論点を多く含むが、その分析はもはや本稿の目的を超えている。

35　*Муравьева*. C.20.